

2019.5.26
流山



昭和初期をピークに甲府盆地南部などで猛威をふるい、地方病と呼ばれた「日本住血吸虫病」を取り上げた「茶碗の欠片 杉山なか女と地方病(日本住血吸虫病)」(百年書房)を4月に出版した。

「記憶の風化が進む中、病気で苦しみ、悲しみの中で亡くなった人たちの姿を知ってもらいたかった」と語る。

自身は、東京・深川で4人きょうだいの3番目として生まれた。終戦直後に母親の実家がある旧上九一色村に一家

日本住血吸虫病 日本住血吸虫という寄生虫が、皮膚から体内に侵入して感染する風土病。体内に入り込んだ寄生虫は肝硬変などを引き起こし、手足がやせ細ったり、腹部が膨れ上がったりして最悪の場合は死に至る。寄生虫は巻き貝「宮入貝」に寄生して成長することから、県内では宮入貝の駆除が進められ、1996年に流行終息宣言が出された。

地方病 風化させない



日本住血吸虫病をテーマにした本を出版

橋田活子 さん 76

6人でも移り住んだが、小中学校時代にはいじめを経験。「子供時代のつらい経験が、差別や弱い立場の人たちのことを考えるきっかけになった」と話す。

夫の死をきっかけに、1993年に甲府市から甲斐市に移住。自宅近くの畑で農作業をしていた高齢者から、「昔はこの辺りでも『おながが大さくなる病』がはやってね」

そんな生活の中で心の支えとなったのが本だ。戦後の厳しい暮らしの中でも、父親は本や雑誌を買ってくれたため、「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子の作品や外国文学に夢中になった。高校卒業後から自身でも詩や小説を書くようになり、その後も、県庁福祉センターの職員として障害を持つ子供たちの世話を続けながら、詩集などの自費出版を続けてきた。

「あの家のおばあちゃんも地方病で亡くなったのよ」との話聞き、地方病の存在を知った。図書館で詳しく調べようとしても資料が少なく、「若い世代は地方病を知らない」との限界も目にしたことで、「多くの人を苦しめてきた病、

「多くの人を苦しめてきた病、その記憶を風化させたくない」と考えようになった。執筆前には、宮入貝の実物を見るために長野の研究所を訪問。他県の地方病の実態を知ろうと、広野や初岡にも足を運んだ。「取材を重ねることで、当時の人たちの姿が脳裏に浮かび、執筆意欲がふつふつと湧き上がってきた」という。

著書では、地方病との闘いの歴史を叙事詩としてまとめた。明治時代に原因究明を訴え、死の間際に自分の遺体を解剖に提供する献体を願い出した酒田村(現甲府市)の幽霊、杉山なかの生涯を取り上げていて、「当時は献体がほとんどなかった時代。病気で苦しむ人たちのため、自分の遺体を差し出したなかの人となりに興味を抱いた」と話す。「奇病」と言われ、患者たちが差別を受けてきた歴史や、原因究明に取り組んだ医師たちのエピソードも盛り込んだ。

現在は次作の構想を練っていて、笛吹市出身でハンセン病患者の救済に取り組んだ医師小川正子の生涯をテーマにした作品を考えている。「これからも弱い立場の人、目障りに生きる人たちの由を取り上げた文学作品をつくりたい」と意欲を見せている。

書籍は四六判、268ページで2200円(税抜き)。県内の書店または百年書房(03・6666・92594)で注文できる。(鈴木健史)

「多くの人を苦しめてきた病、その記憶を風化させたくない」と考えようになった。執筆前には、宮入貝の実物を見るために長野の研究所を訪問。他県の地方病の実態を知ろうと、広野や初岡にも足を運んだ。「取材を重ねることで、当時の人たちの姿が脳裏に浮かび、執筆意欲がふつふつと湧き上がってきた」という。

著書では、地方病との闘いの歴史を叙事詩としてまとめた。明治時代に原因究明を訴え、死の間際に自分の遺体を解剖に提供する献体を願い出した酒田村(現甲府市)の幽霊、杉山なかの生涯を取り上げていて、「当時は献体がほとんどなかった時代。病気で苦しむ人たちのため、自分の遺体を差し出したなかの人となりに興味を抱いた」と話す。「奇病」と言われ、患者たちが差別を受けてきた歴史や、原因究明に取り組んだ医師たちのエピソードも盛り込んだ。

現在は次作の構想を練っていて、笛吹市出身でハンセン病患者の救済に取り組んだ医師小川正子の生涯をテーマにした作品を考えている。「これからも弱い立場の人、目障りに生きる人たちの由を取り上げた文学作品をつくりたい」と意欲を見せている。

書籍は四六判、268ページで2200円(税抜き)。県内の書店または百年書房(03・6666・92594)で注文できる。(鈴木健史)